Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **46**, 73－81(1998)
武庫川女子大紀要（人文・社会科学）

体育学科スキー実習と学友会スキーの学生評価(2)
－満足感を構成する要因の比較－

中村　哲士，會田　　宏，野老　　稔，中西　　匠，水田　英男*
（武庫川女子大学文学部教育学科体育専攻）
（*武庫川女子大学文学部人間関係学科）

The Student Evaluation in subject-type and non-subject-type Ski Practice(2)
－Factors of the Satisfaction to the Ski Practice－

Tetsushi Nakamura, Hiroshi Aida, Minoru Tokoro, Takumi Nakanishi, Hideo Mizuta*

Physical Education Major,
Department of Education, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan
**Department of Human Relations, School of Letters*
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

This paper is the 2nd report of the comparative study on subject-type and non-subject-type ski practice. In the preceding studies, the structures of the student evaluation and determinant factors of the satisfaction in the ski practice as a curriculum of the department of Physical education(subject-type ski practice)were reported. The purpose of this study was to clarify the determinant factors of the satisfaction to the ski practice as a service program of the student's association(non-subject-type ski practice)and the contribution degree of the factors. The participants responded to 45 questions. Their data were analyzed by applying factor analysis and multiple regression analysis and compared with the preceding study.

The results were summarized as follows:

1. The both practices were evaluated very well. As for the recognition level of the purpose and the goal of the practice, the participants in subject-type ski practice were higher.
2. Five factors were extracted as the determinant factors of the comprehensive satisfaction in each practice. The first 3 factors were the same in both type of ski practice. These were"instruction in ski exercise", "alternating current among participants" and "motivation".
3. Only one factor, "motivation", was contributory to the comprehensive satisfaction in non-subject-type ski practice.

緒　言

本研究は，島田ら[1]野老ら[2]會田ら[3]中西ら[4]によって行われた本学文学部教育学科体育専攻ならびに短期大学部体育学科(以下体育学科)の学外実習科目「スキー」(以下スキー実習)の臨床教育学的研究を受けて行われた比較研究の第二報である．

第一報[5]は，島田ら[1]野老ら[2]の研究をもとに，動機，期待，触発，満足感などの総体的評価を，学友会スキー[6]側を対照群に置き，これまでのスキー実習研究の真価を検証するべく実施された．結果からは，①実習前のスキー経験量と事前学習量の比較分析では，実習参加直前までの両集団に大きな差は認められない．②スキー実習参加者には，スキー自体を楽しみたいとする直接的動機と個人的な技術的目標設定の高さがうかがえ，学友会スキー参加者には，スキーというスポーツを介して人的交流を計ろうという動機と，その機会を楽しもうとする気楽さが強く感じられる．③スキー実習参加者は，技術の向上を自らが確信し，よりスキーが好きになったことを実感して実習を終了しており，学友会スキー参加者においても，技術の向上に期待以上の効果があった結果から，評価に変化が生じていた．継続意志と満足感の間には，比例関係が存在していた．④「指導者の指導法」や「学生の習熟度」の問題に加え，班構成方法に仲間の問題が加えられた．自己研修時間増加の問題についても，技術向上からの必然性が感じられた，などが明らかとされ，両実習ともに，技術向上が満足感を刺激し，「できる」という自信を植え付け，継続意志へと反映する傾向が内在されていると指摘した．

しかし，これらの調査結果からの分析では，総体的評価を捉えたに過ぎず，上記指摘を一面ばかりから捉えると，技術向上の偏重を助長する指摘にも受け止められる．極論するなら，技術向上を最大の目的・目標とするならば，プロフェッショナルなスキー指導者に直接指導を受ける体制を整えさえすれば良いとされ，「授業としてのスキー実習」・「課外活動としての学友会スキー」の教育目標や教育的配慮などは全て無視されよう．すなわち，満足度の総体的評価のみをもって実習の是非を問うのではなく，各実習の教育目標の達成度についても，尺度化され，測定された上で評価が下されるべきとする課題が残された．

この点について，會田ら[3]は，授業評価の構造と受講の満足感に貢献する要因を計り，授業改善に役立つ基礎資料を得ようと，島田ら[1]出野ら[7]本間ら[8]の研究を参考に仮因子を設定し，因子分析および重回帰分析を用いた分析検討を試みている．その結果，「ゲレンデ講習での指導」，「実習からの触発・参加意欲」，「仲間との交流」，「講義・教材」，「技術向上」の満足感を構成する5つの因子を抽出し，特に満足感に貢献度の高かった因子，「実習からの触発・参加意欲」，「技術向上」，「ゲレンデ講習での指導」の3つを，充実した実習を行うための最重要要件と指摘している．また，スキー実習における班分け，学習講義，指導者と学生のコミュニケーション，将来の指導者としての動機づけなどについても，その指導内容や方法に工夫の余地が残されていることにまで言及している．

會田ら[3]の研究が詳細な報告をしているとしても，問題となる点は，第一報[5]でも指摘したとおり，スキー実習が授業であることや体育学科単独の実習であることから，学科内部だけの甘口な評価に陥ってはいないかという点であり，第二報においても対照となる集団との比較検討が必要視された．

従って，今回の第二報も，学友会スキー側を対照群に，満足感の構成要因と満足感に影響を及ぼす要因について，會田ら[3]の研究を土台に比較検討することを主命題とし，授業評価の観点をより客観化できるような基礎資料の充実を目的に実施された．

方　法

1. 分析の対象と各実習の概要

(1)スキー実習

対象は，1997年2月23日(日)～3月1日(土)に，長野県志賀高原高天ヶ原スキー場で開講されたスキー実習に参加した武庫川女子大学文学部教育学科体育専攻及び短期大学部体育学科の学生170名であった．所属別参加学生の内訳は，大学体育専攻2年生が72名，短大体育学科1年生が98名であった．

概要については，スキー実習が授業であり，また，これまでの研究対象とされてきたため，本学平成8年度開講科目要項[9][10]ならびに島田ら[1]野老ら[2]會田ら[3]の研究を参照されたい．

(2)学友会スキー

対象は，1998年3月2日(月)～3月6日(金)に，長野県志賀高原発哺温泉スキー場で開催された学友会スキーに参加した武庫川女子大学及び短期大学部の学生52名であった．所属別参加学生の内訳は，大学が，文学部国文学科2名，文学部英米文学科1名，文学部教育学科体育専攻5名，文学部人間関係学科

1名，生活環境学部食物栄養学科3名，薬学部8名の計20名，短期大学部が，国文学科9名，英語学科2名，児童教育学科6名，体育学科6名，人間関係学科5名，生活造形学科4名の計32名であった．

概要については，中村ら[5]の研究を参照されたい．

2. 調査の内容と方法

(1)スキー実習

會田ら[3]の研究で使用された調査結果を採用した．

(2)学友会スキー

中村ら[5]の研究で使用された「平成9年度学友会スキーに関する調査」の調査票に，會田ら[3]の研究で作成された調査票を学友会スキー用に再構成し追加した．調査の実施については，第4日の夕食後に集合調査方法を用い無記名方式で行なった．

會田ら[3]の研究で使用された調査票は，7つの評価観点を仮因子として設定し42質問項目を設け，さらに総合的授業評価に関する3質問項目を加えた45質問項目で構成されている．その仮因子の観点と対応する質問項目番号については，Table 1.に再掲した．

Table 1. 仮因子の観点と対応する質問項目の番号　（會田ら[3]の研究より転載）

仮　因　子	質問項目の番号							
コミュニケーションに関する項目	5	10	14	17	22	25	31	36
プログラムに関する項目	3	6	11	18	21	26	32	39
授業の内容と方法に関する項目	7	12	15	19	27	33	37	40
技術に関する項目	1	20	28	38				
自己評価に関する項目	2	8	16	24	29	34	41	
集団生活･マナーに関する項目	4	13	30					
触発に関する項目	9	23	35	42				
満足感総合評価	43	44	45					

学友会スキーに用いた調査票で，會田ら[3]の研究で使用された調査票と一部表現を変えて質問した項目は，16．の「5日間の実習で最後までやる気が衰えなかった」を「3日間の実習で最後までやる気が衰えなかった」に，34．の「5日間の実習中，途中でいやになった」を「3日間の実習中，途中でいやになった」に，39．の「要項やテキストはわかりやすかった」を「要項はわかりやすかった」に，43．の「スキー実習は体育学科の授業としてふさわしい」を「学友会スキーは学友会の行事としてふさわしい」に，の4件であり，その他の質問の内容は，比較研究であるためできるだけ準拠するよう努めた．

3. 分析の内容と手続き

分析は，学生評価から満足感を構成する要因を抽出し，授業改善への方向性を探ろうとする會田ら[3]の研究の立場を踏襲し，学友会スキー参加者を対照群として比較検討することを念頭に置いた．

手続きについても會田ら[3]の研究同様，5件法による満足感の因子分析と，総合評価に対する貢献度予測の重回帰分析を中心解析方法として採用した．得られたデータの分析も，會田ら[3]が用いたSPSS Base 7.5J for Windowsを使用し実施された．

結果と考察

1. 学生評価の比較

スキー実習と学友会スキーの満足感の比較結果をTable 2.に示した．

実習の総合評価に関する3つの質問の比較では，44.「参加前の期待が充足された」と45.「スキー実習（学友会スキー）に参加してよかった」においては，有意差は認められなかったが，質問項目番号43．の「スキー実習は体育学科の授業としてふさわしい（スキー実習）」と「学友会スキーは学友会の行事としてふさわしい（学友会スキー）」において，両者間に有意な差が認められた．結果から，両実習ともに学生から

非常に高く評価されたことがうかがえるが，授業とそうではない研修との間に，目的･目標の認識レベルにおいて差が生じていることが感じられ，事前研修から充分に学習を積んでいるスキー実習参加者のほうが，実習のあり方をよく理解して臨んでいると推察された．

Table 2. スキー実習と学友会スキーの満足度比較

質問項目	スキー実習 (N=170) 平均値	標準偏差	学友会スキー (N=52) 平均値	標準偏差	T－値	P
1. スキーの技術が上達した	4.64	0.66	4.37	0.69	2.554	*
2. ゲレンデ講習に意欲的に出席した	4.74	0.52	4.50	0.75	2.605	**
3. 班分けの方法は適切であった	3.76	1.19	3.77	1.06	0.054	
4. スキー場でのマナーについて学習できた	3.97	0.81	3.48	0.90	3.718	***
5. 友情が深まった	4.27	0.79	4.12	0.86	1.173	
6. ゲレンデ講習はよかった	4.38	0.98	4.44	0.75	0.406	
7. ゲレンデ講習の内容はよくまとまっていた	4.19	1.06	4.06	1.11	0.765	
8. 夜の講義に意欲的であった	3.75	1.04	3.83	0.96	0.494	
9. スキーの楽しさを発見できた	4.65	0.65	4.54	0.67	1.060	
10. 新しい友人ができた	4.56	0.70	4.21	0.94	2.897	**
11. 学内での事前オリエンテーションはよかった	3.35	0.80	2.88	0.73	3.781	***
12. ゲレンデ講習の内容は理解しやすかった	4.09	1.10	4.15	0.94	0.355	
13. 集団生活のルールが守れた	4.29	0.76	3.92	0.95	2.889	**
14. 同じ班のメンバーとコミュニケーションがとれた	4.54	0.61	4.31	1.00	2.017	*
15. 上達のきっかけがつかめた	4.49	0.67	4.27	0.77	1.999	*
16. 5日間の実習で最後までやる気が衰えなかった	4.27	0.97	4.12	1.02	0.964	
17. 同じ班以外のメンバーとコミュニケーションがとれた	3.90	0.97	3.46	1.11	2.765	**
18. 夜の講義はよかった	3.27	0.93	3.60	0.98	2.211	*
19. ゲレンデ講習の進め方はよかった	4.09	1.08	4.10	0.96	0.060	
20. スキーに関する理論が学習できた	3.81	0.86	3.37	0.89	3.202	**
21. 班別ミーティングはよかった	4.09	1.02	4.06	0.89	0.191	
22. 指導者とコミュニケーションがとれた	4.22	1.00	4.33	0.79	0.727	
23. これからもスキーを続けていきたい	4.71	0.66	4.62	0.72	0.842	
24. ゲレンデ講習では積極的に質問した	3.88	0.96	3.90	0.91	0.133	
25. 班の中の雰囲気はよかった	4.50	0.74	4.48	0.87	0.163	
26. 夜のスタンツはよかった	4.29	0.81	4.02	0.80	2.109	*
27. ゲレンデ講習での指導者の話し方は適切だった	4.22	1.05	4.27	0.87	0.312	
28. 自分のスキーの課題がわかった	4.45	0.71	4.10	0.82	2.997	**
29. ゲレンデ講習は毎回フレッシュに取り組めた	4.19	0.94	4.12	0.86	0.479	
30. ケガの防止や病気の予防が実践できた	3.88	0.98	3.38	0.99	3.212	**
31. たくさんの先生とコミュニケーションがとれた	3.46	0.96	3.06	0.92	2.655	**
32. 現地でのスケジュールはよかった	3.67	0.91	3.81	0.93	0.966	
33. 個人個人に声をかける指導者に出会えた	3.76	1.24	3.98	0.85	1.195	
34. 5日間の実習中，途中でいやになった	2.38	1.32	2.42	1.27	0.193	
35. スキーを教えてみたい	3.21	1.23	2.48	1.08	3.849	***
36. 同じ班のメンバー同士でアドバイスがあった	3.79	0.97	3.19	1.25	3.635	***
37. ゲレンデ講習では指導者の熱意が感じられた	4.30	0.98	4.40	0.82	0.668	
38. 新しい技術が習得できた	4.70	0.66	4.35	0.86	3.105	**
39. 要項やテキストはわかりやすかった	3.61	0.87	3.69	0.92	0.572	
40. 自分にあった教え方に出会えた	3.91	1.13	3.87	1.01	0.229	
41. 講習以外の時間に技術上達について考えた	3.82	0.91	3.83	1.00	0.068	
42. 機会があればまたこの実習に参加したい	4.20	0.95	4.31	0.90	0.740	
43. スキー実習は体育学科の授業としてふさわしい	4.76	0.49	4.46	0.73	3.411	**
44. 受講前の期待が充足された	4.58	0.80	4.46	0.73	0.965	
45. 実習に参加してよかった	4.79	0.53	4.69	0.58	1.164	

1. *：P<0.05　**：P<0.01　***：P<0.001
2. 質問項目については，會田ら[3]の研究で使用されたものをそのまま掲載した

次に，會田ら[3]の研究で，肯定的な回答を示した項目と，否定的に回答したと解釈した項目について比較を行った．

肯定的な回答を示したと解釈された1.「スキーの技術が向上した」，2.「ゲレンデ講習に意欲的に出席した」，9.「スキーの楽しさを発見できた」，10.「新しい友人ができた」，14.「同じ班のメンバーとコミュニケーションがとれた」，23.「これからもスキーを続けていきたい」，38.「新しい技術が習得できた」の各質問項目においては，全ての質問項目の平均値がスキー実習のほうが上回っていることが明らかとなった．その上，9.「スキーの楽しさを発見できた」，23.「これからもスキーを続けていきたい」の2つの項目を除いた他の質問項目に有意差が認められていた．Table 2.より，学友会スキー参加者の評価が低いとは決していえるえるものではないが，以上のことから，学友会スキーのようなスキー旅行的な研修では，スキーの継続実施に際しての動機づけまでは満たされるとしても，スキー実習のように授業として行なわれた場合のような，より広範囲で高次な満足感にまでは達しさせることはできないと推察されよう．

逆に，否定的に回答したと捉えられた3.「班分けの方法は適切であった」，8.「夜の講義に意欲的に出席した」，18.「夜の講義はよかった」，31.「たくさんの先生とコミュニケーションがとれた」，33.「個人個人に声をかける指導者と出会えた」，35.「スキーを教えてみたい」の各質問項目では，31.「たくさんの先生とコミュニケーションがとれた」，35.「スキーを教えてみたい」の2項目においてスキー実習側が肯定的で，18.「夜の講義はよかった」の1項目において学友会スキー側が肯定的であり，それぞれ有意な差が認められた．否定的回答の項目についても，両実習が表裏の関係にあるような大きな平均値上の差があるわけではなく，有意な差が認められたことに関して言えば，31.「たくさんの先生とコミュニケーションがとれた」については，スキー実習の方が，教師の人数も多く，期間が長いこと，35.「スキーを教えてみたい」については，指導者を目指す体育学科学生にとって一般学生と比べれば当然の結果であること，18.「夜の講義はよかった」については，学友会スキーの期間の問題から長時間の講義は実施されなかったことなどが原因と考えられる．よって，両実習の否定的回答には大きな差が存在しているとはいえないと解釈する．

問題は，統計学上有意な差が認められたとは言え，両実習の評価傾向が似通っている点にあると考える．両実習において引率･指導を担当した経験のある今回の研究スタッフとしては，このような満足感を計る調査においても両者の間に特徴的な違いを見出したいことは確かにうなづけるが，教師と学生の双方の目標達成度については，計りきることができないという点が指摘されよう．會田ら[3]が指摘した，班分け方法，学習講義の内容や方法，コミュニケーションの取り方，享受する能力と享受される能力の開発，技能の向上などについて，明確な目標の設定を行うとともに，目標達成度を客観的に計れるような調査の企画や，その土台となる資料などの収集が，今後のスキー実習研究に必要不可欠なものであると提案したい．

2．満足感構成因子の比較

満足感を構成する要因に違いがあるのか，学友会スキーの調査結果においても，會田ら[3]の研究同様因子分析を行ない検討した．

分析は，主因子法を用い，Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転実施の後，因子構造を得た．因子数の決定は，基本的に因子の固有値が1.0以上のものとしつつ，會田ら[3]の研究を参考に行なわれた．因子の解釈および命名は，回転後の因子負荷量が0.5以上の項目に着目して行った．結果は，学友会スキーの因子分析結果のみをTable 3.に示した．

第1因子は，12.「ゲレンデ講習の内容は理解しやすかった」，7.「ゲレンデ講習の内容はよくまとまっていた」，19.「ゲレンデ講習の進め方はよかった」，27.「ゲレンデ講習での指導者の話し方は適切だった」，37.「ゲレンデ講習では指導者の熱意が感じられた」などの項目の因子負荷量が大きい．このことは，因子を代表する項目が，會田ら[3]の研究の第1因子とほとんど一致していると言える．よって，この因子を，ゲレンデ講習での指導内容や指導法に直接関連する項目と解釈し，會田ら[3]の研究同様「ゲレンデ講習での指導」と命名した．

Table 3. 学友会スキーにおける学生評価の因子分析結果

質問項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	共通性
12. ゲレンデ講習の内容は理解しやすかった	0.882	−0.030	0.115	0.090	−0.108	0.812
7. ゲレンデ講習の内容はよくまとまっていた	0.857	0.097	0.050	0.057	−0.067	0.754
19. ゲレンデ講習の進め方はよかった	0.846	0.139	0.002	−0.024	0.001	0.736
27. ゲレンデ講習での指導者の話し方は適切だった	0.760	0.002	0.361	0.053	0.004	0.711
37. ゲレンデ講習では指導者の熱意が感じられた	0.738	0.061	−0.002	0.242	−0.015	0.607
22. 指導者とコミュニケーションがとれた	0.709	0.322	0.006	0.017	−0.033	0.607
18. 夜の講義はよかった	0.688	0.478	0.052	−0.309	0.155	0.824
21. 班別ミーティングはよかった	0.622	0.594	0.108	−0.079	−0.112	0.770
6. ゲレンデ講習はよかった	0.585	0.185	0.233	0.122	0.269	0.518
40. 自分にあった教え方に出会えた	0.565	0.072	0.190	0.323	0.370	0.602
32. 現地でのスケジュールはよかった	0.540	−0.024	0.209	0.207	0.256	0.444
33. 個人個人に声をかける指導者に出会えた	0.497	−0.269	−0.005	0.257	0.397	0.543
26. 夜のスタンツはよかった	0.466	0.245	0.256	0.017	0.244	0.403
42. 機会があればまた参加したい	0.428	0.344	0.252	0.246	−0.134	0.443
10. 新しい友人ができた	0.211	0.752	0.109	0.187	0.072	0.662
25. 班の中の雰囲気はよかった	0.252	0.746	0.074	0.199	−0.206	0.708
14. 同じ班のメンバーとコミュニケーションがとれた	0.094	0.662	0.141	0.160	0.098	0.502
17. 同じ班以外のメンバーとコミュニケーションがとれた	0.042	0.634	0.031	0.149	0.219	0.475
5. 友情が深まった	0.032	0.536	0.369	−0.181	0.134	0.475
8. 夜の講義に意欲的であった	0.506	0.529	0.072	−0.127	0.291	0.642
35. スキーを教えてみたい	−0.158	0.382	−0.009	0.360	−0.058	0.304
11. 学内での事前オリエンテーションはよかった	0.210	0.380	−0.225	0.102	0.156	0.274
30. ケガの防止や病気の予防が実践できた	0.038	0.371	0.066	0.107	0.169	0.183
16. 3 日間の実習で最後までやる気が衰えなかった	0.205	−0.053	0.715	0.044	0.086	0.565
29. ゲレンデ講習は毎回フレッシュに取り組めた	0.244	0.166	0.696	0.064	−0.087	0.583
9. スキーの楽しさを発見できた	0.257	−0.030	0.669	0.242	−0.157	0.598
23. これからもスキーを続けていきたい	−0.041	0.214	0.637	0.102	−0.198	0.503
24. ゲレンデ講習では積極的に質問した	0.123	0.265	0.603	0.066	0.208	0.497
2. ゲレンデ講習に意欲的に出席した	0.212	0.039	0.597	−0.087	0.254	0.475
34. 3 日間の実習中途中でいやになった	0.056	−0.161	−0.557	0.097	−0.103	0.359
15. 上達のきっかけがつかめた	0.151	−0.038	0.545	0.495	0.079	0.572
1. スキーの技術が上達した	0.216	−0.103	0.452	0.447	0.096	0.471
28. 自分のスキーの課題がわかった	−0.104	−0.076	0.424	0.370	0.083	0.340
31. たくさんの先生とコミュニケーションがとれた	−0.154	0.288	−0.143	0.542	0.178	0.452
38. 新しい技術が習得できた	0.305	−0.008	0.255	0.507	0.055	0.418
36. 同じ班のメンバー同士でアドバイスがあった	0.154	0.193	−0.018	0.462	0.073	0.280
20. スキーに関する理論が学習できた	0.077	0.095	0.078	0.434	0.043	0.211
39. パンフレットはわかりやすかった	0.150	0.212	0.094	0.403	0.175	0.270
13. 集団生活のルールが守れた	0.135	0.223	0.008	0.159	0.615	0.472
4. スキー場でのマナーについて学習できた	−0.005	0.356	0.155	−0.175	0.564	0.500
41. 講習以外の時間に技術上達について考えた	−0.051	0.084	−0.086	0.291	0.505	0.602
3. 班分けの方法は適切であった	0.003	0.016	0.360	0.241	0.500	0.438
因子寄与	7.261	4.516	4.479	2.778	2.322	21.356
因子寄与率(%)	17.289	10.752	10.664	6.615	5.529	50.850

1. 質問項目については，学友会スキー用に一部表現を変えたものを使用した

第2因子は，10.「新しい友人ができた」，25.「班の中の雰囲気はよかった」，14.「同じ班のメンバーとコミュニケーションがとれた」，17.「同じ班以外のメンバーとコミュニケーションがとれた」，5.「友情が深まった」などの項目の因子負荷量が大きい．これらも，因子を代表する項目が，會田ら[3]の研究の第3因子とほとんど一致していると言える．従って，友人とのコミュニケーションの深まりや広がりを示す項目と解釈し，「仲間との交流」と命名した．

第3因子は，16.「3日間の実習で最後までやる気が衰えなかった」，29.「ゲレンデ講習は毎回フレッシュに取り組めた」，9.「スキーの楽しさを発見できた」，23.「これからもスキーを続けていきたい」，24.「ゲレンデ講習では積極的に質問した」などの項目の因子負荷量が大きい．このことも，因子を代表する項目が，會田ら[3]の研究の第2因子とほとんど一致していると言える．よって，触発され，参加意欲を掻き立てられ，学友会スキーを肯定的にとらえている意識の現われと解釈し，「学友会スキーからの触発・参加意欲」と命名した．

第4因子は，31.「たくさんの先生とコミュニケーションがとれた」，38.「新しい技術が習得できた」の2項目の因子負荷量が大きい．2項目しか抽出できなかったため，次に因子負荷量が大きかった15.「上達のきっかけがつかめた」，36.「同じ班のメンバー同士でアドバイスがあった」，20.「スキーに関する理論が学習できた」の項目を含め解釈を試みた．これらは，指導者や班員，あるいは同行した友人などから助言され，自己の中で内面化し，技術獲得のきっかけをつかんだことを示す項目と解釈できることから，「助言・きっかけ」と命名した．

第5因子は，13.「集団生活のルールが守れた」，4.「スキー場でのマナーについて学習できた」，41.「講習以外の時間に技術上達について考えた」などの項目の因子負荷量が大きい．これらは，実生活から離れた場所で行われ，なおかつ新しい仲間とともにする野外活動や集団生活であったことから，ルールやマナー，そして自分自身が置かれている状況の判断の公正さを示す項目と解釈し，「ルール・マナー・公正さ」と命名した．

学友会スキーにおける因子分析の結果から，参加者の満足感を構成する要因を，「ゲレンデ講習での指導」，「仲間との交流」，「学友会スキーからの触発・参加意欲」，「助言・きっかけ」，「ルール・マナー・公正さ」の5つとしたが，第3因子までの3つは，スキー実習における因子分析結果とほぼ同様の結果となった．このことから，特に上記3つの要因は，どのような形態でスキーの実習や研修が展開されようとも，実習充実のためには，重要なポイントとなることが予測できる．

3．満足感に貢献する要因の比較

学友会スキーにおける満足感を構成する要因のうち，どの要因が総合評価に最も影響を与えているのかについても，會田ら[3]の研究同様，総合評価に関する3つの質問項目の平均得点を従属変数とし，抽出された各因子の中で因子負荷量が大きい上位3つの質問項目の平均得点を独立変数として重回帰分析を行った．結果は，Table 4.のとおりである．

Table 4. 総合評価に対する各要因の相関係数，標準回帰係数および貢献度

要　　因	相関係数	標準回帰係数	貢献度(%)
ゲレンデ講習での指導	0.40**	0.18	7.47
仲間との交流	0.41**	0.22	8.87
学友会スキーからの触発・参加意欲	0.56***	0.43***	24.25
助言・きっかけ	0.40**	0.12	4.83
ルール・マナー・公正さ	0.17	0.06	1.05

1. *：P＜0.05　**：P＜0.01　***：P＜0.001
2. 貢献度(%)は，相関係数×標準回帰係数×100で算出した

総合評価と満足感を構成する5つの要因との間には，「ルール・マナー・公正さ」を除くすべての要因において有意な正の相関関係が認められた．また，総合評価を従属変数，5つの要因を独立変数とした場合，

有意な重相関関係が認められた（$r=0.68$，$p<0.001$）．各独立変数の標準回帰係数（β）が有意なものは，「学友会スキーからの触発・参加意欲」だけであった．総合評価に対する貢献度の高い要因に関する分析においても，「学友会スキーからの触発・参加意欲」が高い値を示すだけであった．

會田ら[3]の研究では，総合評価を規程する要因を「実習からの触発・参加意欲」，「技術向上」，「ゲレンデ講習での指導」の3つとし，総合評価の予測変数として有効であることを指摘している．しかし，今回の研究においては，相関関係で同様な傾向を示しつつも，総合評価予測に対して最も説明力を有する変数は，「学友会スキーからの触発・参加意欲」の1要因という結果になった．このことは，学友会スキーが授業ではないことや期間の違いからという理由が，最も大きな原因と考えられるが，側面を変えて見るなら，充実した実習を行なうための鍵は，「実習からの触発・参加意欲」に対する評価を如何に向上させるかにあるということを，形式の違う両実習双方から指摘を受けたのではないかと解釈できないだろうか．すなわち，触発や参加意欲の維持・向上は何によって享受されているのかが問題であり，単に，総合評価によって実習の是非や満足感を計るのではなく，いつ何からどの程度の触発を受けたのかや，参加意欲は期間中どのように変化していったのかなどについて検討する余地が残ったと推考する．

それをとく鍵は，両実習の分析から「ゲレンデ講習での指導」，「技術向上」，「仲間との交流」，「講義・教材」，「助言・きっかけ」，「ルール・マナー・公正さ」の各要因が中心となるべきことを付記する．

4. 比較検討後の結語

會田ら[3]の研究の結語では，研究結果だけを考慮した授業内容や方法の変更に対し警告を発しつつ，教育目標をどの程度学生に達成させることができたのかについての理解と，目標達成度と満足感の両面からの授業評価観点の保持が重要であると締めくくられている．今回の研究からの結果を加え再考するなら，會田ら[3]の研究の指摘に加え，学生側の「意欲や達成度の流動性」と，教師側の「学生の変化を読み取る能力の開発」，「変化に対する指導・助言の内容と適時性」について検討が行なわれるよう期待したいと結論する．野外における集中実習では，初期の目標に対し，認識・技能レベルや人的交流範囲の点で変化が生じやすい．それに早く教師側が気づき，各学生のレベルに応じたプログラムの提供がなされなければ，より高次の充実は生まれまい．今後，スキー実習研究が継続されるなら，班分けや班の再構成，学習講義の内容や方法と時期，技能レベルと言葉かけの内容・適時性，互いのコミュニケーションの図り方や程度など，触発を促し参加意欲を掻き立てるような要件に関して，現場における実践的研究が行われるよう提案したい．

まとめ

本研究は，島田ら[1]野老ら[2]會田ら[3]中西ら[4]のスキー実習における臨床教育学的研究を受けて行われた学友会スキーとの比較研究の第二報である．従って，今回の第二報も，学友会スキー側を対照群に置き，当初の計画どおり，會田ら[3]の研究を土台に，満足感の構成要因と満足感に影響を及ぼす要因について比較検討することを主命題とし，授業評価の観点をより客観化できるような基礎資料の充実を目的に実施した．本研究の成果を以下に要約しまとめとする．

1. 両実習ともに学生から非常に高く評価されていたが，目的・目標の認識レベルにおいて，事前研修から充分に学習を積んでいるスキー実習参加者のほうが，実習のあり方をよく理解して臨んでいる傾向がうかがえた．また，肯定的な回答項目と否定的な回答項目についても，大きな差は存在していなかった．しかし，旅行的な研修では，スキーの継続実施に際しての動機づけまでは満たされるとしても，授業として行なわれるスキー実習のような，より広範囲で高次な満足感にまでは達しさせることはできないと推察した．以上のような，評価傾向が似通っている点から，會田ら[3]が指摘した，班分け方法，学習講義の内容や方法，コミュニケーションの取り方，享受する能力と享受される能力の開発，技能の向上などについて，明確な目標の設定を行うとともに，目標達成度を客観的に計れるような調査の企画や，その土台となる資料などの収集が，今後のスキー実習研究に必要不可欠なものであると提案した．
2. 学友会スキー参加者の満足感を構成する因子は，「ゲレンデ講習での指導」，「仲間との交流」，「学友会

スキーからの触発·参加意欲」,「助言·きっかけ」,「ルール·マナー·公正さ」の5つが抽出された．第3因子までの3つは，スキー実習研究と同様の結果となった．よって,「ゲレンデ講習での指導」,「仲間との交流」,「実習からの触発·参加意欲」の3つの要因は，どのような形態でスキーの実習や研修が展開されようとも，充実した実習を行うための重要なポイントであると予測できる．

3. 学友会スキーの満足感に貢献するものは,「学友会スキーからの触発·参加意欲」だけであった．単に，総合評価によって実習の是非や満足感を計るのではなく，いつ何からどの程度の触発を受けたのかや，参加意欲は期間中どのように変化していったのかなどについて検討する余地が残った．両実習の分析から「ゲレンデ講習での指導」,「技術向上」,「仲間との交流」,「講義·教材」,「助言·きっかけ」,「ルール·マナー·公正さ」の各要因を独立変数とするような，実践的研究が望まれる．

文　献

1）島田博司·三井正也·野老稔·徳家雅子·二宮恒夫，武庫川女子大学教育研究所レポート，**16**，187–246(1997)
2）野老稔·島田博司·二宮恒夫·會田宏·中西匠·加村博，武庫川女子大学教育研究所レポート，**20**，11–90(1998)
3）會田宏·中西匠·野老稔·二宮恒夫，武庫川女子大学紀要，**45**，49–55(1997)
4）中西匠·會田宏·野老稔·塩満勝麿，武庫川女子大学紀要，**45**，73–82(1997)
5）中村哲士·野老稔·中西匠·會田宏·水田英男，武庫川女子大学紀要，**46**，65–72(1998)
6）前掲5)，(1998)
7）出野務·今安達也，武庫川女子大学教育研究所レポート，**18**，1–20(1997)
8）本間崇·千足耕一·布目安則·南隆尚，筑波大学体育センター　大学体育研究，**17**，37–48(1995)
9）武庫川女子大学文学部教育学科体育専攻，平成8年度開講科目要項，40(1996)
10）武庫川女子大学短期大学部体育学科，平成8年度開講科目要項，13(1996)